

令和元年6月20日現在

機関番号：31302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370867

研究課題名(和文)16世紀後半の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観の変遷

研究課題名(英文)The Pilgrims' View on Islam, Muslims and the Crusades in the Second Half of the Sixteenth Century

研究代表者

櫻井 康人(SAKURAI, YASUTO)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：60382652

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：1551年のオスマン帝国によるシオン山の占拠という事件にもかかわらず、当該時期の十字軍の希望は、伝統的に十字軍に関与してきたフランス出身者と、宗教改革の過程で新たなカトリック世界の盟主となったスペイン出身者に限定され、16世紀末には彼らの中からも姿を消すこととなる。その背景には、ヨーロッパ内部の宗教的混乱や、オスマン帝国との外交関係があった。

その一方で、ヨーロッパ世界内部の和(=異端の肅正)とヨーロッパ世界の防衛、という「教会の十字軍」とも呼べる新しいタイプの十字軍観が、16世紀末に現れることとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

十字軍史研究の分野において、従来は聖地巡礼の過程で反イスラーム・反ムスリム意識を抱いた者たちが十字軍熱の高揚に寄与したとされてきた。それに対して、本研究で明らかとされたのは、むしろ十字軍熱の冷却傾向であり、また盛期十字軍の歴史化であり、その背景にはヨーロッパ世界の変化・変容があった。このように、本研究の成果は十字軍史の分野のみならず、現代の社会情勢の中でもしばしば「十字軍」という言葉が用いられることを考えると、本研究の持つ社会的意義も決して小さなものではないと思われる。

研究成果の概要(英文)：In 1551, Suleiman occupied the Mount Sion. This event, however, didn't bring the desire for the crusades to the minds of Pilgrims. In this period, that desire was limited to the French, who had been traditionally engaged with the crusading movement, and the Spanish, who had become the leader of the Catholic world in the course of the Reformation. But, in the end of the Sixteenth century, even that desire disappeared in the minds of them. In the background, there were the chaotic condition of the religious sphere in Europe, and the political and economical relation with the Ottoman Empire.

Meanwhile, there appeared the new type of the concept of crusade, that is "the crusade of the church", which means the peace within the European world the religious cleansing and the defense of Europe.

研究分野：十字軍史

キーワード：十字軍 オスマン帝国 聖地巡礼 イスラーム

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究遂行者は、これまでに十字軍の全体像を理解する一環として、いわゆる「後期十字軍」(14世紀以降の十字軍)の実態を解明するために、16世紀前半までの聖地巡礼記に着目して研究を行ってきた。概して従来の研究者たちは、聖地巡礼者が十字軍のプロパガンディストとして機能したということの疑いをもなく前提としてきた。しかし、少なくとも16世紀前半の聖地巡礼記を分析した限りにおいては、そのような傾向はごく少数のカトリック圏内の教会人のみ限定されたものであったことが明らかとなった。では、このような傾向はその後どうなったのであろうか、というごく自然な疑問が、本研究開始当初の背景である。

### 2. 研究の目的

本研究では、本研究遂行者がこれまでに行ってきた16世紀前半までの聖地巡礼記の分析から得ることのできた成果をさらに深化・発展させるために、16世紀後半に作成された聖地巡礼記から十字軍観・イスラーム観・ムスリム観を探ることが目的とされる。より具体的には、宗教改革運動・オスマン帝国による聖地周辺域の支配およびヨーロッパ侵入の激化により終焉したとされる「聖地巡礼の黄金期」以降の時期において、ヨーロッパ世界における十字軍観・イスラーム観・ムスリム観などに変化が見られたのか否か、見られたとすればどのような変化であったのか、ということについての検討が本研究の目的となる。

### 3. 研究の方法

(1)本研究で対象となる16世紀後半に作成された旅行記の類は、全部で約200作品現存している。まずは、内容および人称に基づいて、旅行記を6つの系統、すなわちメモワール(聖地回復論覚書)、旅行書、創作、聖地巡礼記、巡礼ガイド、その他(版画・絵画などの図像的資料)に分類した上で、検討・分析の対象となる聖地巡礼記、およびその補助的史料としての巡礼ガイドを確定した。次に、それぞれの作品について、作者の出身地・出自・旅程などの基本情報を整理した上で、各作品から十字軍観・イスラーム観・ムスリム観に関する情報を抽出し、時期別・地域別における十字軍観等に関する傾向分析を行った。そして、最終的には、16世紀後半という大きな枠組みの中におけるそれらの変化・変容を追っていき、その背景や意味について考えた。

(2)なおその際、レバントの海戦の前年にあたる1570年までを一つの時期区分として、またオスマン帝国と神聖ローマ帝国との関係が悪化する1590年代以降を一つの時期区分として、すなわち、16世紀後半を1551~1570年・1571~1590年・1591~1600年という三つの時期に区分して検討した。以上が、本研究の方法についてである。

### 4. 研究成果

(1)まず、1551~1570年に作成された旅行記で、検討対象に該当するものは全41作品を数えたが、その内で聖地巡礼記と断定されたのは24作品、補助的史料として用いられる巡礼ガイドは2作品となった。

聖地巡礼記作者の地域的な特徴として挙げられるのは、1530~40年代に減少したドイツ地域出身者が再び増加傾向を見せたということである。当該時期は、例えばオスマン帝国によるマルタ島包囲などによって地中海世界の情勢は悪化したが、ヴェネツィアとオスマン帝国支配下の聖地とを結ぶ巡礼者運搬システムは維持されていた。従って、16世紀後半を「聖地巡礼の黄金期の終焉」とみなしてきた従来の見解は、まずここで退けられねばならない。

さて、当該時期においては、大きな二つの事件が起こった。一つは1551年にスレイマン1世がシオン山を占拠してそこにモスクを築いたことである。もう一つは、すでに触れた1565年のマルタ島包囲である。さらに後者は、スパイ容疑として捕縛され、場合によっては奴隷とされる巡礼者の数を多くするという結果を伴うこととなった。このような出来事は、必然的に聖地巡礼者たちの中に反「トルコ人」感情を高め、過去の「(聖地)十字軍」とは異なる形の「(反オスマン帝国)十字軍」待望論を創り出すこととなった。ただし、そのような考え方は全ヨーロッパ的に共有されたものではなく、カトリック圏内の教会人という限定的な世界において共有されたものにすぎなかった。

(2)次に、1571~1590年に作成された旅行記で、検討対象に該当するものは全44作品を数えたが、その内で聖地巡礼記と断定されたのは24作品、補助的史料として用いられる巡礼ガイドは0作品となった。

聖地巡礼記作者についての地域的に見た当該時期の特徴は、フランス地域出身者の減少傾向である。フランス王国内において断続的に生じた宗教戦争が、その背景の一つにあると考えられよう。しかし、全ヨーロッパ的に見るとこの時期に作成された聖地巡礼記の数そのものには減少は見られず、従って、当該時期においても「聖地巡礼の黄金期」は継続していたと判断される。

さて、当該時期における大きな出来事として挙げられねばならないのが、レバントの海戦において「十字軍」宣誓に基づいて結成された神聖同盟軍がオスマン帝国に勝利したこと、しかしその一方で、1573年に締結されたオスマン帝国とヴェネツィアとの間での条約によってヴェ

ネツィアがキプロス島をオスマン帝国に割譲したことである。言うまでもなく、聖地巡礼に直接的な影響を与えたのは後者であった。オスマン帝国によるキプロス島支配の結果として、聖地巡礼者がオスマン帝国領に足を踏み入れる地点は、ヴァローナ（現ヴローラ）にまで後退した。そして、聖地巡礼者たちは、早くもヴァローナにおいてオスマン帝国の役人たちへの「心付け」を伴う厳しい管理化に置かれることとなり、同じことはキプロス島および聖地でも繰り返された。このような状況の中で、聖地巡礼者たちは多くの金品を搾取され、とりわけ概してオスマン帝国と敵対していた神聖ローマ帝国領出身者たちが大きな被害を受けることとなった。しかしこのような状況に至ってもなお、ムスリムや「トルコ人」に対する嫌悪感を露わにしているのは、フランス・スペイン・イタリアといったカトリック圏出身者に特徴的なものであった。そして、さらにそれが十字軍待望論にまで結び付けられたのは、伝統的に「十字軍」に関与してきたフランス地域出身者、そして宗教改革・対抗宗教改革の波の中でカトリックの盟主としての地位を確立していったスペイン地域出身者に限定されるにまで至ったのである。すなわち、当該時期において十字軍待望論者は、さらにその範囲を狭めた、ということになるのである。

(3)最後に、1591～1600年に作成された旅行記で、検討対象に該当するものは全22作品を数えたが、その中で聖地巡礼記と断定されたのは11作品、補助的史料として用いられる巡礼ガイドは0作品となった。

まずは地域的な傾向という側面から見てみると、当該時期においては再び神聖ローマ帝国領内出身の巡礼記作者の数が減少することとなる。1591年のオスマン帝国によるビハチ占領に端を発する、いわゆる「長期トルコ戦い（十五年戦争）」が、その背景にあったのであろう。しかし、ヨーロッパ全体的には大きくその数を減らすことはなく、1600年という世紀転換期に向けて、依然として「聖地巡礼の黄金期」は継続していたとすることができる。そしてこの時期の巡礼者たちの多くも、ヴェネツィアを経由して聖地に向かったが、道中におけるオスマン帝国による管理体制は緩和した。1590年にヴェネツィアがオスマン帝国によるコルフ島攻撃を退けることに成功したことが、その背景の一つにあった。確かに巡礼者たちは、聖地周辺域では度々「心付け」を要求されたが、当該時期においては、それが反「トルコ人」感情と強く結びつくことはなかった。

当該時期における大きな特徴の一つは、「盛期十字軍」（13世紀までの「十字軍」）の歴史化が大きく進展したことであった。それは、過去の栄光と現状との対比から生じたものであった。そしてこのような状況の中で、十字軍待望論はついにフランス人やスペイン人たちの中からもその姿を消すこととなった。ただし、注目すべき点がある。それは、「教会の十字軍」なる表現が、幾つかの聖地巡礼記に散見されることである。ここで言う「教会の十字軍」とは、ヨーロッパ世界内部の平和、すなわち異端の肅正、とオスマン帝国からのヨーロッパの防衛を意味する。ここに我々は、17世紀に向けて新たな「十字軍」観が到来したという予兆を見ることができるのである。

(4)以上が本研究の目的に対する成果であるが、副次的に16世紀後半から17世紀初頭に出されたフェルマーン（スルタン勅令）の分析から、当該時期における聖地巡礼者の実態に関する考察も行うことができた。

その考察結果について本研究の中心課題に関連する点だけを挙げておくと、1570年代にはオスマン帝国の中央政府も聖地巡礼者から搾取しようとする役人の存在を問題視していたこと、その結果として、聖地巡礼者の管理という職務がサンジャク・ベイからカーディーへと移行したこと、ただし、役人による搾取は必ずしも私腹を肥やすためばかりではなく、聖地巡礼者の安全を確保するためには多額の経費が必要とされたこと、そして、聖地巡礼者たちは必ずしも被害者ばかりではなく、現地人たちを困惑させる加害者も決して少なくなかったこと、が明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

櫻井 康人、1551～1570年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 後期十字軍再考(8)、ヨーロッパ文化史研究、査読有、17巻、2016、53-83

櫻井 康人、1571～1590年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 後期十字軍再考(9)、ヨーロッパ文化史研究、査読有、18巻、2017、125-158

櫻井 康人、エルサレム巡礼史に関する補助的考察 フェルマーンの語るもの、東北学院大学論集 歴史と文化(旧歴史学・地理学) 査読無、55巻、2017、181-213

櫻井 康人、紹介：高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世 史料の機能、日本とヨーロッパ』、史学雑誌、査読有、126編12号、2017、83-84

櫻井 康人、1591～1600年の聖地巡礼記に見るイスラーム観・ムスリム観・十字軍観 後期十字軍再考(10)、ヨーロッパ文化史研究、査読有、20巻、2019、141-165

〔学会発表〕(計1件)

櫻井 康人、ヨーロッパ史から見た十字軍、日本中東学会第34回年次大会(招待講演)

2018

〔図書〕(計1件)

櫻井 康人、図説 十字軍、河出書房新社、2019、総 139

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。